様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　5　月　24　日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０４５８
研究課題名（和文）　初対面コミュニケーションにおける話題管理スキーマに関する日米中韓対照研究

研究課題名（英文）　Topic Management Schemata during Conversations with Strangers among native speakers of Japanese, American English, Chinese, and Korean Languages

研究代表者
三牧　陽子（MIMAKI YOKO）
大阪大学・留学生センター・教授
研究者番号：30239339

研究成果の概要（和文）：
異文化間コミュニケーションの機会の多い日本語、米語、中国語、韓国語の各母語話者の持つ文化特有の初対面会話における「話題管理（話題選択および話題展開）スキーマ」を明らかにすることを目的に、４言語の母語話者間の初対面会話資料および意識調査資料を収集し分析した。その結果、話題選択スキーマ、「社会的な自己」と「プライベートな自己」の開示の様相、話題の展開方法などから、4言語共通の話題管理スキーマおよび各言語文化に特徴的な話題管理スキーマを実証的に示した。

研究成果の概要（英文）：
In order to investigate the topic management schemata during conversations with strangers among native speakers of Japanese, American English, Chinese, and Korean languages, 57 video taped conversations, interview data, and questionnaires were collected and analyzed. The main findings includes the similarities as well as the culture specific features of topic management schemata as of selecting topics, the way of self disclosure of social self and private self, and the w ay of developing topics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	1,300.000	390,000	1,690,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：異文化コミュニケーション

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

１．研究開始当初の背景

話題管理の問題、すなわち、話題選択（何を話題として取り上げ、回避するか)、と話題展開の方法は留意されやすく、特に人間関係が未確立の初対面の会話においては、会話の中で生じた話題管理に関する違和感がそれ以上の人間関係の発展を阻害することにもつながりかねない。今後ますますグローバル化する世界にあっては異文化間コミュニケーションの機会が増加し、ある文化においては友好的な発話と解釈される質問や会話の展開の仕方が、別の文化では否定的な印象を与えかねず、グローバル社会に生きる社会人にとって初対面場面における話題管理の問題は公私ともに重要性が増している。中でも、従来多いアンケートによる方法では捉えきれない初対面会話における話題管理の実態を実証的に検証する研究が欠かせない。

ところが、初対面会話データを収集分析した実証的な話題選択や情報交換の様相に関する先行研究には、単一母語場面（三牧 1999a,1999b；Svennevig 1999）や日韓対照（奥山 2005）等があるもののまだ限られ、米語、中国語については実証的な研究は見られない。また、話題の展開に関しては、日本語母語話者や日中対照(楊 2007;蔡 2008 等）を中心に見られるが、いずれも話題の展開部に焦点を絞ったミクロな研究である。また大半の先行研究は大学生を対象としたものが圧倒的に多い。つまり、日本語母語話者にとって接触の機会の多い、米語、中国語、韓国語母語話者の母語場面における話題管理の様相を実証的に明らかにすることには現代的な意義があるにもかかわらず、社会人を対象にした４言語の実証的な対照研究は従来なされていない状態であった。

２．研究の目的

円滑な多文化間コミュニケーションに資するための基礎研究として、日本語、米語、中国語、韓国語の４言語を取り上げ、母語話者同士の初対面会話資料および意識調査資料を収集・分析することによって、母語話者の持つ各文化特有の初対面会話における「話題管理」スキーマおよびスラテジーを明らかにすることを目的とする。

次の４点が本研究の独創的な特徴である。

(1) 概念：分析対象を話題選択だけでなく、話題導入や展開に拡大し、「話題管理」という概念を提唱すること。

(2) 対象言語：従来多くみられる２言語対照から、日本語、米語、中国語、韓国語の４言語に拡大し、さらに、中国語については北京と台湾の双方で収集すること。

(3) 研究方法：アンケート形式による初対面会話の話題調査による先行研究が多い中、実証的な初対面会話を同一条件で採集し、同時に実施した意識調査と併せ包括的に分析すること。

(4) 資料収集対象者：先行研究で多く扱われる大学生ではなく社会人とすること。

３．研究の方法

(1) データの種類

日本語：大阪、米語：サンフランシスコ、中国語：北京、台北・高雄、韓国語：ソウルにおいて、各言語母語話者の男女社会人協力者を募集し、以下の３種類のデータを収集、分析した。協力者の多様性をコントロールするため、職種は問わないが、現在常勤の職にあること、および、年齢 25～35 歳の２点の条件を設定した。

① 会話データ：初対面の同性２名を入室するまでは顔を合わせないように同時に部屋に案内し、15 分間自由に会話するようにとのみ伝えて調査者は退室した。会話は録音録画した。会話参加者間の年齢はできるだけ同年齢か年齢差が少なくなるよう組み合わせたが、中には数歳差のペアもある。

② アンケートデータ：会話収録後に会話参加者が別室になるように案内し、初対面会話についての一般的な意識、および初対面会話において選択/回避する話題に関するアンケートへの記入を求めた。

③ インタビューデータ：会話の感想を尋ね、その後、アンケート用紙を確認しながら、初対面会話に関する意識について反構造化形式でインタビューを実施した。

表１　調査協力者

言語	日本語	米語	中国語		韓国語
収集都市	大阪	SF	北京	台北 高雄	ソウル
女性ペア	6	5	6	7	7
平均年齢	31:2	25:6	27:7	27:7	29:10
男性ペア	6	*	6	7	7
平均年齢	31:4	*	29:6	30:4	32:2
合計ペア	12	5	12	14	14
協力者数	24	5	24	28	28

＊　米語男性協力者の多くが常勤の職を持ちながらも学生身分も同時に持つことが判明し，学生生活が話題の中心になる例も多く見られたため、今回の分析には含めないことにした。

(2) 調査協力者

職業は、公務員、会社員（事務、営業、技術者など)、教員、歯科医、デザイナー、販売員などバラエティに富む。日本語、米語、中国語（台湾）は、地元出身者が大勢を占めた（関西 92%、サンフランシスコ 100%、台北高雄 86%）が、中国語の北京および韓国語のソウルでは他地方出身者の比率がそれぞ

れ 71%、57%を占め、調査地が首都であるか否かによって出身地の比率に差がみられた。また、米語データ協力者の多くが日本や中国のエスニックな背景を持ち、会話の中でエスニックな背景や当該言語を話題にする率が非常に高いことが明らかになったため、妥当性に問題があると判断した。

(3)会話データの処理

① 文字化：対象言語の母語話者である大学院生等調査協力者によって、最初に母語で文字化し、次いで和訳した。主要な文字化の規則は次の通りである。
↑：急激な上昇、拡大文字：大きな声、縮小文字：小声、下線：笑いながらの発話、 / ：同時発話、{ }：非言語行動

② 話題のタグ付け：各会話データについて、研究代表者、研究分担者、および研究協力者蔡の３名が個別に大話題と小話題のタグ付けを行った案を持ち寄り、異なった箇所については検討の上、大話題と小話題を決定した。

４．研究成果

(1) 話題選択スキーマについて

日米中韓女性データの分析から、４言語データに共通性の高い話題選択スキーマ（６割以上のペアが選択：下図の赤部分）として「仕事」「アイデンティティ（自己紹介等）」「共通点（会話実験参加）」「居住」の４カテゴリーが、一方、特定文化のみのスキーマ（白部分）として、「キャリア」（米中）、「趣味・楽しみ」（日米中）、「恋愛・結婚」（中韓）が、それぞれ見出された。

表２ 話題選択スキーマ（カテゴリー）

	日	米	中	韓
アイデンティティ	★	★	★	★★
仕事関係	★	★	★	★
キャリア		☆	★★	
居住	☆	★★★	★★★	☆
共通点	☆	★	★	★★★
趣味・楽しみ	★	★★★	☆	
恋愛・結婚			☆	★★
その他		★★	★	

☆ 60%～ ★ 100%以上
★★140%以上 ★★★180%以上

各言語の特徴：①日本語ペア：全体に話題数が少ないのは、いったん選択した話題が持続するから。恋愛・結婚の話題化は回避。②米語：「その他」が多く、比較的自由に話題選択する傾向がある。恋愛・結婚の話題化は回避。③中国語：全領域から幅広く話題選択する傾向があり、中でも「キャリア」「居住」が目立って多い。④韓国語：③とは対照的に特定の話題カテゴリーに集中する顕著な傾向が見られた。中でも「共通点」「恋愛・結婚」は他グループに比して目立って多い。

(2) 自己開示について

初対面の自由会話場面では、自発的自己開示とともに、自己開示要求も盛んに観察されるが、は相手に関心を示すとともにFTAともなり得る性格を有する。そこで、初対面の人間関係において適切とされる自己開示の内容および範囲、開示の仕方に注目し分析した。自己開示の内容については、① 自己に関する情報（社会的な自己・プライベートな自己）、② 自己の有する知識、③ 自己の価値観や見解、を枠組みとした。

① 自己に関する情報（社会的な自己）については、ほぼ日中韓の３言語ペアに共通して，名前、所属、職歴を含む経歴、居住地など、および② 自己の有する知識は、特に躊躇なく要求されるとともに開示されていた。

一方、「勤務先名」を含むプライベートな自己について、自発的己開示と自己開示要求の比率を分析した結果、中国語/韓国語ペアでは「勤務先名」「結婚・恋人の有無」等について自己開示要求が盛んであるのに対し、日本語ペアでは自発的自己開示はするものの、自己開示要求は完全に回避されていることを見出した。以上から、「社会的な自己」と「プライベートな自己」との境界が日中韓では異なることを実証的に示した（図１）。

図１ 初対面会話における自己開示スキーマ

また、自己開示の特徴として、事実レベルのみを述べるに留まる日本語ペアと「自己の価値観や見解の開示」が活発な中国語・韓国語ペアとは対照的であること、さらに、中国語ペアでは見解を双方が提示し議論に発展することも多いなど、母語文化ごとの自己開示の様相の特徴を示した。

(3) 話題の展開について

日本語ペアは異なり大話題数が最も少ないが、それは、いったん選択した大話題内で関連のある小話題を整然と展開するために一話題が長く継続することによること、一方、中

国語・韓国語ペアでは異なり大話題数が多く、同一大話題が３回以上再帰する頻度も高いため延べ話題数も多いこと、しかし３回以上繰り返される話題は仕事などに限定されることを明らかにし、話題のマクロな展開の方法に関する言語ごとの特徴を実証的に示した。

さらに、一般的な論点について参加者が見解や意見を相互に述べ合う展開パターンが中国語ペアに顕著な特徴であることも実例とともに示した。

一方、日台中ペア話題展開部に焦点を当ててミクロに分析した結果からは、日本語ペアでは話者が協働的に言語的、非言語的な話題転換表現を用いながら転換する（76%）のに対し中国語（北京、台湾）ペアでは話題転換表現なしの「突発的変換」が３割に上ることが明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①三牧陽子（2010）「初対面コミュニケーションにおける話題管理スキーマに関する日米中韓対照研究」『平成19年度～平成21年度科学研究費補助金　基盤研究（C）課題番号19520458　研究成果報告書』全60頁. 査読なし

②三牧陽子・難波康治（2010）「日中韓の社会人初対面母語場面における自己開示の様相」『社会言語科学会第25回大会発表論文集』54-57. 査読あり

③ 難波康治・三牧陽子（2010）「社会人初対面会話における話題展開のパターン ―日中韓の母語場面の調査をもとに―」『社会言語科学会第25回大会発表論文集』82-85. 査読あり

④ 蔡　諒福（2010）「母語場面初対面会話における話題転換 ―日台中の社会人を対象に―」『社会言語科学会第25回大会発表論文集』114-117. 査読あり

〔学会発表〕（計４件）

① 三牧陽子・難波康治「日中韓の社会人初対面母語場面における自己開示の様相」第25回社会言語科学会研究大会において口頭発表（2010年３月13日）、慶応義塾大学

② 難波康治・三牧陽子「社会人初対面会話における話題展開のパターン―日中韓の母語場面の調査をもとに―」第 25 回社会言語科学会研究大会において口頭発表（2010年３月14日）、慶応義塾大学

③ 蔡　諒福「母語場面初対面会話における話題転換 ―日台中の社会人を対象に―」第25回社会言語科学会研究大会において口頭発表（2010年３月14日）、慶応義塾大学

④ 三牧陽子・難波康治「社会人初対面会話における話題選択―日米中韓のデータをもとに―」Japanese Studies Association of Australia-International Conference on Japanese Language Education,（2009 年７月 15 日） The University of New South Wales, Australia.

６．研究組織

(1)研究代表者
三牧　陽子（MIMAKI YOKO）
大阪大学・留学生センター・教授
研究者番号：30239339

(2)研究分担者
難波　康治（NAMBA KOJI）
大阪大学・留学生センター・准教授
研究者番号：30198402

(3)研究協力者
崔　信淑（CUI XINSHU）
北京林業大学外語学院（中国北京）・副教授
文　瑞蘭（MOON SEORAN）
白石芸術大学外国語学部（韓国ソウル）・専任講師
蔡　諒福（TSAI LIANGFU）
大阪大学言語文化研究科博士後期課程
韓　喜善（HAN HEESUN）
大阪大学言語文化研究科博士後期課程
中橋　真穂（NAKAHASHI MAHO）
大阪大学言語文化研究科博士前期課程